

理事長ドクトリン（平成26年3月20日 第253回理事会）

まなざしを世界に向け、

21世紀の課題を担う国際人を育てる学校を目標とする

～創立百周年に向けて、武蔵学園の経営戦略～

理事長 根津 公一

1. 世界の動き、日本の状況をどう認識するか

戦後、我が国が安定的な高度成長を遂げていた時代には、私立学校というものは一般に社会の動向にとらわれることなく、自ら信ずるところの教育を貫いて行けば良いとされてきました。しかし、世界の動き、日本の状況はもはや武蔵が「変わらない」ことを許してはくれなくなってきたと思います。

1.1 グローバル化

20世紀末、東西冷戦の終結と共に、地球規模での貿易・金融と人的交流の拡大が起き、さらにインターネットの普及により情報の交流が急激に拡大しました。21世紀には「国家」という概念を超えた、いわゆるボーダーレス化が、経済、政治、文化の様々な分野で一層進んでいます。日本の片隅に住んで「世界」から目を背けていても、否応なく「世界」は向こうからやって来ます。

グローバル化とは、地球の多様な国々に住む人々の間が近くなり、お互いに影響を及ぼし合うようになることです。私達が教育している、学生・生徒達は、そのグローバル化、ボーダーレス化の進む地球の市民として、21世紀の世界に出て行くこととなります。

90年前、日本の教育界がまだ、殆ど「世界」に目を向けていなかった頃に「東西文化の融合を担う人物」「世界に雄飛するにたえる人物」を育てることを掲げた武蔵だからこそ、グローバル化の進む世界にふさわしい人間を育てて行かなければならないと思います。

1.2 日本の人口減少、少子高齢化

一方で、我が国は今、未曾有の少子高齢社会を迎えようとしています。そのことは、私学経営をきわめて厳しい状況に追い詰めています。もはや identity の明確でない私学は、生き残ることは出来ません。

それだけではなく、少子高齢化は、私達が社会に送り出そうとする、学生・生徒に求められる能力の質にも大きな影響を及ぼしています。

大学について言えば、もはや大学は同一世代人口の半数が行く教育機関となろうと
しています。今後はいわゆる大学院大学に限らず、いろいろな形での **Graduate
school** が社会の指導層を養成していくことになるでしょう。そして大学を出て直接
社会に就職する者には、大学がどのような「社会人に必要な知的基盤」を与えること
が出来るかが、課題となります。

高校中学についても、大学への進学実績ばかりでなく、将来成人した後、変化し流動
化する社会をたくましく生き抜く「基礎的な教養と柔軟で開かれた知性」がより一
層問われることとなります。

ここでも武蔵が 90 年前に掲げた「自ら調べ自ら考える人物」の育成こそ、現在の日
本で問われる所以であると思う次第です。

2. 学園の **identity** を何に求めるか

武蔵学園は、これまで少数教育によって品質の高さを維持していることが、他との
差別化の要因でした。「自ら調べ自ら考える人物」を育てるために、高校中学の「本
物に出会う教育」、大学の「ゼミの武蔵」を実践してきた成果は、誇ってよいこと
です。

また、この少数教育の伝統は、今後も大学・高校中学とも変える必要はないと思いま
す。

しかし、現在の競争環境の中で、「私学が少数教育をしていること」だけでは **identity**
としては明らかに不足であると言わざるを得ません。

これまでの「自ら調べ自ら考える人物」育成の成果の上に立って、「東西文化融合の
我が民族理想を遂行し得べき人物」「世界に雄飛するにたえる人物」を育てること
こそが、今日の時代に武蔵が問われるべき **identity** であると考えます。

2022 年の学園創立百周年に向けて、「まなざしを世界に向け、21 世紀の課題を担う
国際人を育てる学校」を目標として、これからの武蔵学園の経営戦略を進めて行き
ます。